

令和元年6月号

◆荒井類 選

《超高齢社会を生きる積極性》

雛壇の前で鍛える大腿筋

越川ミトミ

この句の景は実に可笑しい。大腿筋を鍛えているのは、子どもでも青年でもなく、お雛様を飾って祝う小さな子もいない高齢者であると読んだ。

「失われたものは／失われた時間に包まれて失われていった。／回復の場ともども」（安水稔和『新年』より）。だから、それはもう嘆くまい。さあ、大腿筋を鍛えよう。この句に、超高齢社会を積極的に生きよう、という意気込みを感じるのは私だけだろうか。

《キャバ嬢を詠んでも歴史的かなづかい》

キャバ嬢と見てゐるライバル店の火事 北大路翼

この句の景も可笑しい。「キャバ嬢」とは、キャバクラで接客にあたる（若い）女性のこと。「キャバクラ」とは、「キャバ」がキャバレー、「クラ」がクラブの略で、ホステスが客と同席して接待する飲食店のことである（広辞苑第七版参照）。この定義は、キャバレーにもクラブにもあてはまってしまうので、「キャバレーとクラブの中間的形態の店」（デジタル大辞泉）との解説も参照したい。

客としてキャバクラにいったら、近所で火事があった。キャバ嬢（ホステス）と連れだって見に行ってみれば、「ライバル店の火事」で、それを二人で「見てゐる」という景だ。

こちらの句は、前掲句とはうってかわって、若めの人の句だろう。こういう現代最先端の風俗を詠んだ句に「見てゐる」という歴史的かなづかいが用いられているのにも、ミスマッチの滑稽さを感じる。

《俳句は意外性に富んだとてもおかしい文芸》

やどかりの沢野くんいま脱皮中 秋月祐一

ペットとして飼育しているヤドカリを沢野君と呼んでいるのだろう。その意外性もおもしろいが、その沢野くんが「脱皮中」というのだから笑える。

坪内稔典曰く、「世間では生真面目だけの笑いのない句を伝統的と称しがちですが、それはまちがい。俳句は意外性に富んだとてもおかしい文芸です」。

《酒飲みの風流な言い訳に？》

^{ちよつと}鳥渡 とは鳥渡る間や昼の酒 矢島渚男

「鳥渡」とはなんぞや？（「ちよつと」の振り仮名は原句のママ）。え〜っ、「鳥渡」を「ちよつと」と読むのか！ 辞書を引いてみる。

〈ちよつ - と 【一寸・鳥渡】（広辞苑第七版）〉、大辞林第三版には、〈「ちつと」の転、「鳥渡」は当て字〉という情報もある。なるほど、「鳥」（ちょう）と「渡」（と）で「ちよつと」に当てたわけだ。

さて、掲句だが、言葉遊びの句だ。「ちよつと」の字面を利用して、作者は「ちよつと」の意味を「鳥渡る間」として、「ちよつと」をずいぶんと長い時間に解釈してみせた。

「あなた、『ちよつと飲む』って言ったのに、だいぶ長い時間飲んでいるのね」

「いや、『ちよつと』ってのは『鳥渡る間』で、結構長いんだ…」

奥さんがそれで納得するとも思えないが、酒飲みの言い訳としては風流だ。

月花もなくて酒のむ独り哉 松尾芭蕉

《掛詞！》

冬はつとめて大和ことばを声にする 川辺幸一

「冬はつとめて」が、清少納言の『枕草子』の一節を踏まえていることはいうまでもなからう。

「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず…」。冬は早朝（が趣深い）。雪が降っているのは言うまでもなく…。

そんな冬の早朝だから、「つとめて大和ことばを声にする」ということか。そうすると、掲句の「つとめて」は、「早朝」と「努めて・勉めて（できるだけ）」の掛詞だ。ここに諧謔がある。

《言いたいことは中七下五にのみ存す？》

作者が掲句で言いたいことの本質は、「つとめて（できるだけ）大和ことばを声にする」だ。上五の役割は、『枕草子』をもってきて、句に深みを与えること。（その場合「冬は」は「つとめて」の枕詞的な役割となろう）。上五の措辞を中七下五で裏切ることによって、そこはかたなく滑稽味が醸しだされている。

「春は曙大和ことばを声にする」「夏は夜大和ことばを声にする」「秋は夕暮れ大和ことばを声にする」。いずれの上五（七音だが）も、作者的には不可だったのだろう。「つとめて大和ことばを声にする」の「努めて・勉めて（できるだけ）」が導けないから。

《權未知子の一句を意識？》

この句が、左に引く一句を意識しているだろうことは想像に難くない。川辺幸一ほどの俳人でもそういうことがあるのかと思うとなんだか可笑しい。

春は曙そろそろ帰つてくれないか 權未知子